砂土原町から九段南へ

……四半世紀を振り返って……

加藤淑江さんに聞く

センター設立当初から共に歩まれ、平成11年に退職された加藤淑江さんに、当時を振り返って、思い出などを伺いました。

●加藤さんが入られた当時のセンターのようすなどを…。

センター創立30周年　おめでとうございます。

私がセンターに入ったのは昭和51年も押し迫った12月で、非常勤でいらした理事長を含めて男性職員は６名、女性は２名という小所帯でした。半年早い同期には松村和樹さん（現、京都府立大学大学院教授）がいらっしゃいました。

事務所は新宿区砂土原町の「生泉市ヶ谷ビル」という坂の上にある雑居ビルの４階の１室、同階には他に３テナントが入っているというまことにこじんまりとしたものでした。「砂土原町」の「砂防地すべり」で「よく合っているな」という印象がありました。

●担当されていたお仕事は？

後に企画の事務も担当いたしましたが、私が携わっていたのは技術課の事務で、一般事務の他、委員会の設営事務、旅費計算などが主な仕事でした。今も各部の女性がされているお仕事の規模が小さいものといえばよいでしょうか。当時、旅費はまだ振り込みではなく、都内・遠隔地を問わず実施される委員会での現金の手渡しとなります。女性の出張が認められたのが平成５年からですが、少なからぬ金額の現金を携行することもある出張はかなりの緊張を強いられました。男性職員が手分けして持っていってくださることもありましたが……。

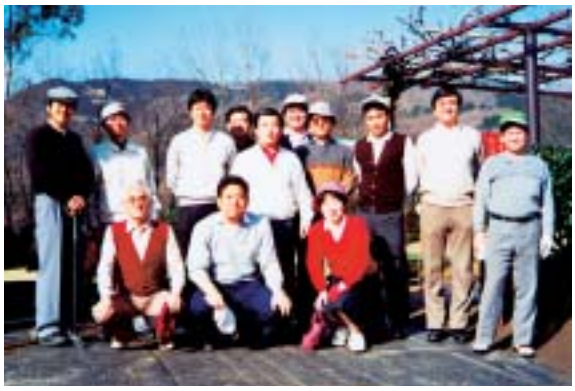
また、会場やその後の懇親会の場所、宿泊先なども、今のようにホームページで探すというわけにはいきません。ホテルのガイドブックや共済手帳を調べ、現地事務所のご指導と電話だけが頼りでセッティングや席順などをお願いし、また現地調査のマイクロバスやレンタカーの手配も、かゆいところに手が届くというようにはいきませんでしたが、ご出席いただいた先生方もそのあたりをご理解の上、ご寛容くださったものと思います。

●現在のような組織になったのは？

「組織は出来てから10年間は横這い」とよく言われますが、61年に経理課ができるまで、組織の基本の形には大きく変化はなかったように思います。その後平成に入ってから技術課が、第一部、第二部、第三部に分かれ、総務部と企画部ができてそれぞれに各課が設置されて、現在に近い形になってきました。事務方が整ったのをきっかけに各課に配置される女性が必要になり、アルバイトさんの募集広告の手配や電話の対応に追われた時期もありました。女性職員が飛躍的に増えたのもこのころからでした。

●砂土原から九段南へ移るきっかけとなった経緯は？

４階の１室からはじまったセンターは、その後他のテナントが一社、また一社と転出されるごとに、会議室から実務室へという具合にだんだんと拡大していきました。そのたびにパーテーションを外して配置換えをするのですが、図面の上に縮尺大の机や家具のボール紙を置いて苦心して配置を考えても、いざ移動させてみるとほんの数センチの誤差で入らなくて、重い思いをして運ぶ職員から苦情が出ることもしばしば……。レイアウトには苦労いたしました。



阿座上理事長杯のひとこま。秩父国際GG（平成元年）

生泉市ヶ谷ビル時代の加藤淑江さん
（昭和６０年）

なごやかな昼休み風景（平成４年）

結局、４階には技術部と会議室、２階に役員室と総務部というふうに分かれ、平成６年には研究所が斜向かいのビルに発足し、また平成７年の阪神淡路大震災の時には資料置き場や作業場用にまた別のビルに１室借りたり、と組織が大きく成長するにつれてますます不便になっていきました。決裁のハンコ一つ頂くのも、研究所への往来は道を横断しなければならないのですから。

とりわけ女性職員に不評だったのは事務所に出没するゴキブリ達で、一晩でゴキブリホイホイにびっしり張り付いたその凄い生態を証拠写真に撮り、当時の理事長のもとへ直訴に及んだりいたしました。ですが理事長ご自身は砂土原町に愛着をお持ちで、移転にはあまり乗り気ではないようにお見受けいたしました。ところが偶然に仲介してくださる方があって今の山脇ビルを一目で気に入られてから、話はトントン拍子に進んだようです。

●「引っ越し」でご苦労されたことなどは？

「引っ越し準備委員会」なるものが結成されて、実際の引っ越し自体は業者さんにお願いするので、もっぱら新しい事務所の各階のレイアウトなどにケンケンガクガクの意見交換が行われました。ことに「禁煙」「分煙」問題、これはなかなか「禁煙派」の意見はとおらず、果ては「それなら女性の香水もどうにかすべきだ」という意見まで出て、結局は空気清浄機をつけた喫煙コーナーの設置で双方が歩み寄ることとなりました。またパーテーションの高さも問題でした。高すぎて座った状態ではお互いの姿が全く見えず、個室のようで良いという人もいましたが、お客様には非常に不評でした。その後、低いものに替えられました。

いろいろとありましたが、平成８年７月には無事引っ越しもすみ、駅から近く便利になりました。新社屋はきれいに改装されており、トイレが清潔で明るく女性陣の評判も上々でした。私事ですが、昭和34年か35年頃、今もこのビルにある「山脇学園」の洋裁科に通っていたことがありまして、当時は手前に高いビルはなく、木立があって広い芝生のスペースに囲まれていたように思います。これも何かのご縁ですね。

●そのほかの思い出などはいかがですか？

そうですね、毎月のお給料からそれぞれの収入に応じてプールしておいた会費で運営される「親和会」というのがありまして、旅行などをいたしました。お好きな方がいて「競馬ツアー」や、はとバスの「ナイトツアー」が企画されたり、毎年の桜の頃には四谷のお堀沿いでお花見、場所取りは新人さんの初仕事でした。そのほか、フロンティアさんとセンター対本省と土研という組み合わせで、野球大会なども行われて楽しかったです。でも組織が大きくなって人数が増えるとともに平成10年をもって「親和会」は閉会となりました。だんだん「余暇」というものについての考え方が変わってきたのでしょうね。

退職後も、災害のニュースなど聞くと「大変！皆さん今日も徹夜かな？」などと当時を思い出します。

皆様のご活躍とご健康を、またセンターのますますのご発展を心よりお祈りいたします。

（聞き手：企画情報課　仲野順子）

イラスト　加藤淑江さん